
月の記憶 後篇

kaguya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の記憶 後篇

【著者名】

NZマーク

N9664Y

【作者名】

k a g o u y a

【あらすじ】

「月の記憶 前篇」が事件編で、後篇である「月の記憶」は解決編ということになります。

前篇はまだ完結していませんが、こつちもちょくちょく更新していくます！

竹取の氏族①（前書き）

月代さかやきの一族編はモロに竹取物語が舞台になっています。原文のイメージは崩壊しています。ご注意を…。

この物語は竹取物語の固有名詞等をお借りしています。当然フィクションです。登場する個人、団体…以下省略。

昔々或る処に、お爺さんとお婆さんがそこそこに仲良く暮らしていました。

まあ、お爺さんってのは俺のことなんだけどな。

もうそつ、お爺さんお婆さんといつても年寄りを想像しないでくれよ？ 名田上の話だよ。

これラブコメだからさ、ラブ＆amp;コメディーだよ？ コメディーって喜劇、笑劇のことでしょう。おやかコボコボの爺さんが体張つて笑劇とか……死ぬつての。

それに年寄り同士のラブ展開とか重要ないつしょ。

だから名前が“お爺さん”と“お婆さん”の、その一人のラブコメつてことで一つよろじく頼むぜ。

俺と婆さんは一応結婚していることになつてゐるのだが、如何せん綺麗でも可愛くもない婆さんだ。子供なんて出来やしない。そろそろ俺の仕事を継いでくれる跡取りが欲しいのだが。

黒髪ロングでおつとつしていてふくよかな女性
ほつちやうで髪が長くてほんわかした雰囲気の女
が美しいとされるこの時代、俺の嫁こと婆さんはガリガリに瘦せていて超
クール、冷めきつてゐる。しかもショートカットなんだ……困った
話だぜ。

婆さん、艶々の黒髪なんだけどなあ……。あと一年間だけ髪切るの
我慢してくれないかなあ……。

いじりでちょっとだけ閑話を。

俺と婆さんが住むのは少し強い風が吹けば飛んでいきそうなボロ家で、しかも田舎過ぎて買い物とか超不便。一家の大黒柱としては

貴族さんが暮らす都の方に新しい家を建てたいと思つてゐる、思つてゐるだけ。

かく言つ俺、仕事は何をしてゐるのかと言ひますと、山で芝刈りじゃないよ？ 山に登つて竹切つて、それをいろいろものに加工して売るつていつ……まあ、物作り屋さんだ。

この仕事は死んだ父さんから受け継いだもので、俺の父さんも、父さんの父さんから受け継いでいる。先祖代々続く竹取の、現在その氏族の長である俺としては、息子が欲しいと切に思つ。

でだ、少し前に婆さんに頼んだんだ。

「俺たち結婚して長いわけだしさ、そろそろ…………」

いや口にして言つのは恥ずかしく、顔を真つ赤にして俺がそう言うと、貴族さんたちのよつたな煌びやかではなく、その辺に転がつていた布を縫い合わせただけのよつたな着物を着る婆さんは

「ふんっ」

と鼻で笑い、

「やだやだ、これだから男は……本当に汚らわしい生き物だわ」「細い脚で俺を追いかう。

「厭らしいことばかり考えていいでもつゞし働いたらどうなの？」

「今月の食費が尽きそうよ？」

嫌な言い方して悪いけど、この時代はまだ男性優位なの！ わかる！？

が、婆さんに頭の上がらないヘタレの俺は、

「うん……竹、刈つてくるよ……」

「はい、いつてらつしゃい。暗くなる前には帰るのよ」

「うん……」

正直、ヘタレな自分が嫌いになるよ。

まあ、なんだ。このように可愛げの欠片もない婆さんだが、飯食

う時と寝る時は一緒にやなきや嫌だと言い張る。そひがちよつとだけ可愛かつたり……。

仮にもずっと一人で暮らしているわけだしな。好きだよ？ 婆さんのこと。

そろそろ閑話は終わりにして

僕と婆さんの
我が家で暮れむ貧乏生活は変化が訪れる

その日、竹刈りにも行かず畠で「ゴロゴロ」していた俺の腹部を、あらうこじか婆さんが力いっぱい踏みつけてきた。

卷之二

鉗痛は顔を引き攣らせていると、婆さんは着物の袖を手で押さえ、せつかく育てた野菜を食うクソ虫を見るよつた田で俺を見下す。ちつちつ。もう少しでパンツ見えそうなのに。

「あなたねえ、毎晩から家で『JUNIOR』『JUNIOR』と…。」——アーヴィングキー？ 違つてしまふ、やつれと云はつておなじよ

婆さんは踏み一歩足に力を入れながら俺を罵倒する。

はつ

「まさかあなた……私に踏まれて悦んでいるの？ やだ、この人真性の変態だわ」

よ、悦んでなんかないやいつ！

「マジ……痛いから……婆さん、知り合って……誰が遡れこであります？」

さらに足に力が入る。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！ まだまだお肌アリツアリです
もん！」 全然お嬢さんじゃないですよ！ はい！

「 そ う よ 、 わ か れ ば い い の 」
「 ふ う …… 」

痛みから解放されてよつやく一息だ。

「なに… その満足した後で一息つくみたいなもの…… 少しばかり不

愉快だわ」

そう言つて再び腹部を足の裏でグリグリ。

*

「ちゃんと働いてくれるのよ

「うごーっす」

「……だらしない返事ね

「行つてきます！」

「はい、いってらっしゃい

婆さんの虐めから解放されたのが夕方近く。もう日が暮れちまい
そうなのに山に行つてこいなんて…。

素人は山なめんなよ！？ 蛇とか普通に出てくるから！ ちょっと
と氣を抜いていると腕とかすぐ蚊の餌食だから！ 痒くなつてから
気付いても遅いからな！

さて、婆さんに半ば強制的に山に入ることを強いられた俺なわけだが
んだ。草木の香り、虫の音には安らぐし、季節ごとに様変わりする
景色には毎年のように心打たれるもの。

とはいって、大自然たる山には神様がいらっしゃる。竹を
切る時はきちんと感謝の心を示さなければならん。じゃないと自然
は牙をむくぞ？ 人間なんてちっぽけな存在さ。この先どんなに時
代が変わろうが自然には敵わないんだ。

と、山の神様にお辞儀をする意味を込めて布で鎌かまを磨く。
よし、今日も一つ頑張るか。

そう意気込み、何度も屈伸をして腰をトントン叩いていると、ふ
と
神様の声が聞こえたような気がしたんだ。

「ひらへおいで、と。

しかしその時はおよそ無意識に歩を進めていた。
自然のバランスを崩さないよう、俺も考えて竹を刈つているつ
りだ。

今日はこの辺りにするかと足を止めるど、な、な、何と
「竹が……光つてやがる……」

不思議に思つて近づくと、根元が光る竹が一本、幻想的に、神々
しくそこにあつた。

本当に山の神様がいらっしゃるのかと思つた。

だが、良かれとも悪かれとも、何を思ったのか、俺はその光輝く
竹を、あろうことかスッパリと切つていた。

無意識か、はたまた神様のお導きか

。

切つた筒の中を覗き込んで見ると、およそ二十九ばかりなる可愛らしい女の子がちょいんと座っていた。

一寸が約3・3センチなので、三寸は約10センチってところだ。

「この小さな女の子は、まあ、当然かもしれないが素っ裸で……。これは貴族様があわします都の方で流行つてているフィギュアじゃなくて人形とかいうものか……？」

「か、可愛すぜやん…」

トモアキとしのぶは誕生した。

第十一章

ふあ よく寝たです
あくび 欠伸をしながらそう言つた。

*

猛ダッシュ。スロー再生しない限り見えないくらいの足の回転で

すつぽんぽんの女の子を掌に乗せて家まで直帰した。

「アーネスト・ヘミングウェイ」

戸口を開くや否や、婆さんは冷たい手で俺を抑制する。

「『ん…………って、そんな』ことよつ！ 見てくれよ婆さんつー婆さん、その呼び方を好まない俺の嫁はギロツトセリに睨んでくる。が、今はもうどうでもいい。後で怒られようが踏まれようが、

あるいは晩飯抜きにされようが今は知ったことじゃない。

そして、俺の掌で可愛らしく座っている女の子の存在に婆さんが

「勿論、お夕方用紙」

「違うよ。 フイギュアじゃなくて、山で女の子を発見したんだ！」

俺を見る婆さんの田は、婆さんが趣味で家庭菜園している野菜に纏わりつく青虫を見る田と同じだった。

オタク馬鹿にすんな！？ オタクのおかげで日本の商業発展して
るんだからな！？

おつほん。

俺の掌で、裸姿でちょこんと正座をする女の子が動いている、つまり生きているということを理解すると、婆さんは居間の中央にある火鉢の席から立ち上がり、これまた趣味である裁縫道具を持ち出してくる。

一 ちよこと動かないで

ハサミを取り出すと俺の仕事着の袖を手に持つ

もももももももも

卷之三

数十分後、俺の仕事着の袖、肘から下の部分を犠牲に、安っぽく不格好だが三寸ばかりの女の子用の着物が出来上がった。

婆さんはそれを女の子に着せ、腰まで伸びる綺麗な黒髪を指の腹で器用に撫で、「で？」と話を元に戻す。

「私の認識が正しいのなら、人間の赤子は一尺五寸ほどだったと思うのだけれど」

— 用ひ才の十倍おなぞ33セントだ。

確かに、婆さんの言つことは正しかつた。光る竹の中にいらつしやつたどこか神々しいこの女の子、身の丈およそ三寸、人間の赤子

の五分の一サイズである。

さらに、それに加えて第一声が“ふあ……よく寝たですう……”だ。

本当に赤子なのだろうか。

「うーん、でもさ、日本語話してるし、赤子ではないにしろやっぱり人間なんじやないのか？」

すると婆さんは納得したかのように一度頷き女の子をボロボロの畳の上にそっと優しく座らせた。

「…………で、どこの女なの？」

「だから竹の中にいたんだって」

俺を見る婆さんの目は恐ろしく冷酷。

「そんな御伽噺のようなこと、信じられるはずがないわ。ねえ、どうこの女と作ったのよ」

「…………What？」

「わ……私が初夜以外で…………そ、そういうことをしてあげなかつたから浮氣したというの！？」

「ばつ……なに勘違いして……つて、だから本当の話なんだってば！」

「男はいい身分よね。ふんっ、家に入れるお金が少ないと思つたらそういうことだったの」

違うよ！ ただ単に仕事が繁盛しないだけだよ！

「どこで御側室なんて作ったの？ ふん、このままでは私との間に跡取りが出来ないと思ったのね、この浮氣者」

「だーかーらー！ 本当に、本当の話なんだって。それに… 俺はお前以外に好きな女なんていねーよ…」

「な…！ こんな時ばかり上手いようと言つて……」

俺も言つて恥ずかしかつたよ！ あーくそつ！

「そ、それを床入りの時に言つてくれるなら…………私も…だ、抱かれ

つて、どうして変な顔をして鼻血を流しているの？」

照れながら言つ、頬を染める婆さんに萌え萌えキュンで鼻血が…。

これは、貴族さんたちが住む都の方で今流行つているいとい、俗に言うシンデレ萌えつてやつか！？

といふか、床入りつて……。意味わかってる？ 単刀直入に言つたらセツ……うわっ、なにする、やめつ。

閑話休題。どうでもいい話は終わりつてことな。

その後、婆さんの命令で俺は竹を使ってこの子の寝具、ベッドを作つた。

この時代でベッドとこうつ寝具を作つたのは俺が初めてではなかろうか。特許取る。

竹の中で出会つたおよそ三寸のこの女の子。その成長は凄まじいもので、三ヶ月も経つ頃にはすっかり人並みほどの身長にまで成長した。とはいへ、45才、つまり150センチないくらいの婆さんは小さい。

俺がこの子の父親で、婆さんが母親 そんな感じでこの三ヶ月を生活してきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9664y/>

月の記憶 後篇

2011年11月30日19時57分発行